

シライさんはお通夜の焼香を終えると、広間で親戚や町の人たちと酒を飲み始めた。シライさんの持ってきた祖父や父の若い頃の写真は、みんなの思い出話の肴になつてゐるようだつた。

少年は、また居場所をなくしてしまひ、外に出てそつとサッカーボールを蹴つたり、台所をのぞいたり、階段の踊り場に座つてマンガを読んだりして暇をつぶした。『みちしお荘』にいた頃はあんなに仲よしだつたシライさんが、家に着くとあつさりと大人の仲間に入つてしまつたのが、ちょっと悔しかつた。

台所の前を通りかかった時、叔母さんたちの話し声が聞こえた。祖父のなきがらを清めている時の話だつた。首筋のしわをタオルで拭いていたら、潮と、魚と、それからさびのにおいが立ち上つてきたのだといつ。「何十年も船に乗つてきたんじやけん、体に染みついどるんじやろうねえ。」と叔母さんが言つと、母が「お義父さんは風呂が嫌いじやつたけんねえ。」と返し、みんなで懐かしそうに笑つていた。

おととしまではこの家にいた人のことを、もうみんなは思い出話にしてしゃべつてゐる。

→ これが一番の理由

急に寂しくなつた。涙は出なくとも、だんだん悲しくなつてきただ。

玄関からまた外に出て、庭のほうに回つた。

納屋の脇に、ほの白いものが見えた。

祖父のタオルだつた。

「何故下ろす?

手を伸ばしかけたが、触るのがなんとなく怖くて、中途半端な位置に手を持ち上げたまま、しばらくタオルを見つめた。

「おう、ここにおつたんか。」

背中に声をかけられ、振り向くと、父とシライさんがいた。

「おじいちゃんの写真、シライさんに見せてもらつとつたら、おもしろかつたんじや。おじいちゃんは漁に出るとときはいつもタオルを巻いとつたろう。じやけん、家にある時の写真を見たら、おまえ、みんなデコのところが白くなつとるんよ。そこだけ日に焼けとらんけん……。」

父はかなり酔つているのか、ろれつの怪しい声で言つて、体を揺すつて笑つた。
「ほいで、今もそつなんじやろうか思つて棺桶をのぞいてみたら、やっぱりデコが白いんよ。じやけん、のう、シライさん、じいちゃんをええ男にして冥土に送つてやらんといけんもんのう……。」

涙声になつてきただ父の言葉を引き取つて、シライさんが「タオルを取りに來たんだ。」と言つた。「やっぱり、タオルがないとおじいちゃんじやないから。」

肴 酒を飲むときに食べるつまみのこと。ここでは、酒を飲むときに興をそそぐ話題の意味として使われている。

悔

拭

呂

怪

棺

冥